

天文学とプラネタリウム

第87回



今月のお題

被災地での天文イベント【その2】



震災から3カ月の日にボランティアで訪れた岩手県大槌町。望遠鏡越しに見る月と土星にはいつも歓声が上がります。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台ALMA推進室)

先月号のこのコラムでもご紹介した被災地での天文イベント。前回の岩手県宮古市田老地区・盛岡市に続いて、津波で大きな被害を受けた岩手県大槌町へも出かけてきました。高台にあったため津波の難を逃れ、現在は避難所となっている城山中央公民館と安渡小学校が会場でした。前回と同様、被災地での活動を志す科学ボランティアグループの連携組織「サイエンスキャラバン311」に参加しての活動です。

まず最初に訪れた城山中央公民館。ちょうど地震から3カ月のその時間、大槌町を眼下に見渡せる公民館の前で1分間の黙祷をささげたのち、太陽投影板を装着した望遠鏡を展開してまずは太陽の観察。残念ながら目立つ黒点がなく「えっこれ太陽!？」という感想も聞かれましたが、望遠鏡自体の構造に興味を持つ子もいました。また「アストロアーツ かけしプロジェクト」から提供していただいた星座早見工作セットも大活躍。日時の合わせ方を教えてあげると、当日の夜空に自分の誕生星座を見つけて大喜びの子供たちでした。他にも糸電話を使った実験やネオジム磁石の実験、昆虫採集など、中高の先生や大学教員、研究員など多様なメンバーをそろえるサイエンスキャラバン311ならではの多彩な活動が展開できました。これら実験ブースは避難所になっている公民館の建物の入り口、炊き出しの料理スペースのお隣で人通りも多く、子供に限らずお年寄りまで楽しんでいく様子が見られました。暗くなってからは天体観望会。屈折望遠鏡と双眼望遠鏡を並べて月と土星の観望です。雲が取れないあいにくの天気でしたが、

雲間からのぞく土星の姿には「かわいい!」という声が上がります。また公民館入り口横の壁に宇宙ビューワ Mitaka や天体写真をプロジェクターで投影し、太陽系旅行や不思議な天体たちの姿を楽しんでいただきました。昼間のうちに宇宙の図鑑を見てブラックホールに興味深々の女の子は、中心にブラックホールがあると言われる銀河の写真をみて大はしゃぎ。壁に投影した銀河の画像の隣に並んで記念撮影し、後日写真を送ることにしました。

次の日は安渡小学校。20m ほど坂を下れば家屋が完全に津波に流されてしまっているようなところにある小学校には250名ほどの方が暮らしており、校庭には仮設住宅の建設が進んでいました。こちらでも校舎の入り口、炊き出し隊の横に机を並べて実験教室。天ブラではその隣に太陽観察望遠鏡とブラックホール模型を設置しました。このブラックホール模型、国立天文台の公開日に使われているものをお借りしたもので、すり鉢状のランプシェードをひっくり返したものにビー玉やゴムボールを放り込むと、その傾斜に沿って回りながら中心に落ちていくというものです。球を入れる方向や速度などの初期条件によって様々な落ち方を見せ、また音を立てて球が回るため子供の関心もひきやすい実験です。何度も何度も試す子、お母さんやおばあさんにもやってみるようにと勧める子など、楽しんでいただけたようでした。

2日間の活動で確信できたことは、天文の話題や天体観望会で多くの方に楽しんでいただくことができるということ。なにより元気に歓声を上げたり質問を投げかけたりしてくれる子供



安渡小学校にやってきたピエロボランティアの方から皿回しを教わった平松。天ブラの弱点は曇った昼間の活動メニューが貧弱なこと。何か良いアイデアをお持ちの方は是非お知らせください。

達の存在に私たち自身が勇気づけられました。一方で難しいと感じるのは、そのような楽しみとの共有よりも一歩踏み込んだ活動がどこまでできるのかということ。もちろん楽しみや学びの機会を提供できるということはとても大事です。とはいえ、自然を相手にする天文学の周囲にいる私たちが、自然の猛威にさらされて苦しんでおられる方々と何ができるのか。科学を修めた私たちが科学の手の届かない自然災害を眼前にしてなにができるのか。考えることは多いですが、これまでの天ブラの活動と同様実践の中から何かヒントが得られないものかと、これからも模索を続けます。